行動計量学会報

日本行動計量学会事務局
〒106 東京都港区南麻布 4−6−7
統計数理研究所　村上研究室

第24回大会を終えて

宮埜寿夫

ようやく終えたことについては，親しい人達を除いてあまり話したくないのですが，今後の大会のこともあり少し書いておきたいと思います．

今回の大会は，ご承知のように日本統計学会との同時開催であり，両学会の調整のために多くの方にご尽力いただきました．心より感謝いたします．

また，会員の方々には例年以上に，大会の準備期間を含め，ご迷惑を御掛けしたことと思います．発表者の名前の記載ミス，発表順の設定ミスなど，あってはならないことですが，２，３ありました．おはずかしい限りです．お詫び申し上げます．

今回の大会は，同時開催であるために例年と異なる体制がとられました．ご承知でない方もおられると思いますので，その例年との違いについて紹介し，そのなかで感じたことをいくつか書いて見たいと思います．

まず，本学会の大会は開催校の独立採算制によって行われてきましたが，この方法は統計学会の方法と異なるため，独立採算制はとるものの開催費用の負担割合を決定するために両学会のメンバーからなる委員会が設置されました．この委員会での決定には，特に千葉大学の田栗先生が大きな影響を与え，本学会側の負担が少なくとも例年並みになるようにしたと考えています．

次に，大会プログラムの編集については，同時開催の利点を活かしたプログラムを作るという観点から，例年とは異なり学会内にプログラム委員会（委員長：繁桝算男）が設置され，特別セッション，両学会共通プログラムの設定が行われました．同時に，この委員会では，開催費用の増加問題に対処することも行われました．

プログラムの作成については，開催校の負担を軽減する一方，開催校の独自性を残すためにどの程度まで作成に関与するかを決めておくべきだったように思います．特に，特別セッションの数については，今後注意して頂ければと思います．特別セッションを多くすれば，確かに発表件数をある程度確保できるという利点はあるものの，逆にごく一部の人によって決定されたテーマであるために会員の全体としての研究方向を反映せず，学会活動の活性をそこなう可能性があります．もちろん，この特別セッションの数，テーマの問題は，今回の大会に限ったことではなく，最近の大会すべてについて言えることと思われます．発表件数が少なくなってきたために止むを得ず増加させたセッションが，プログラムの半数以上を占めている現状について議論の必要はあるでしょう．

また，開催費用の増加については，広告あるいは協賛の募集，運営委員会による講習会の開催，といった形で委員会の協力を得ました．多分，これらの援助が無ければ，今回の開催は無理であったように思います．講習会にご協力いただいた講師の方々，運営委員会（委員長：田栗正章）の方々に感謝申し上げます．また，広告，協賛の募集については，プログラム委員会のメンバー

（次ページに続く）

目　次

1．巻頭言　第２４回大会を終えて	1
2．第２４回日本行動計量学会大会	2
2．1．大会の概要	2
2．2．チュートリアルセミナー	3
2．3．研究発表会	3
2．4．一般公開シンポジウム	3
2．5．日本行動計量学会総会	3
2．6．懇親会	4
3．学会賞の授与	4
3．1．学会賞受賞者のプロフィールおよび授賞理由	4
3．2．優秀賞を受賞して	5
3．3．優秀賞を受賞して	5
4．第２５回日本行動計量学会大会	6
5．小グループ研究会募集	6
6．Ｑ＆Ａ欄の新設	6
7．理事会報告	8
7．1．平成８年度第１回理事会	8
7．2．平成８年度第２回理事会	8
8．学術会議報告	9
9．学会カレンダー	10
9．1．日本計算機統計学会第１０回シンポジウム	10
9．2．応用統計学会第１８回シンポジウム	10
１０．会員による著訳書	10
１１．統計関連学会ホームページ	10
１２．会報担当者より	11

（前ページより続く）

だけでなく，朝野熙彦先生（専修大学）の協力を得ました．例年にないほどの金額を集められたのは，朝野先生のお陰と思っております．

全体として見ると，今回の大会は開催校が開催の雑用に徹したと言えるかもしれません．同時開催という点を考慮するならば，止むを得ないところでありますが，開催校の独自性を多少そこなったとも言えます．今後，同時開催の場合にどのような支援体制を学会でとるのか，通常の場合にはどこまで学会が開催内容に関与するのか，決めておく必要があるかと思います．

最後になりましたが，今回の大会は参加者数，抄録集の売上数，懇親会への参加者数，などいずれもこれまでの大会の記録を破るものでありました．これは，同時開催の効果であると同時に，多くの方々のご支援，行動計量学に対する会員の方々の熱意を反映するものと考えています．有難うございました．

学際的な研究分野を対象とする本学会にとって，関連学会との連携は重要なことと言えます．今回の大会がその推進の一助となれば幸いです．

（みやの　ひさお：日本行動計量学会
第24回大会実行委員長，千葉大学文学部）

2．第24回日本行動計量学会大会

2.1　大会の概要

千葉大学　　田栗正章

日本行動計量学会の第24回大会が，9月7日から9日まで，千葉の幕張メッセで開催されました．本大会は，日本統計学会大会との同時開催で，参加人数も大幅に増加しました．最近3年間の正会員の参加人数は毎年170名前後で推移してきましたが，今回は200名強でした．

また非会員等の参加人数も参加費納入者だけで206名と，過去最高の72名を大幅に越えました．それに伴い抄録集の売上も伸び，350冊を超える勢いでした．この観点からは，統計学会との同時開催のメリットはあったように思えます．

大会前日に開催されたチュートリアル・

セミナーへの参加者は約80名でしたが，資料集は110冊出ました．もちろん会員へのサービスの側面をもつチュートリアル・セミナーだけではかなりの赤字ですが，今後も継続できればと願っています．

今大会をどのように評価するかは，今後の議論に待たねばなりませんが，会員諸氏のご尽力により，大会が無事終了できたことを，開催校一同感謝しております．

2.2　チュートリアルセミナー

今年が2回目となるチュートリアルセミナーは，「項目反応理論と企業や学校への応用」，「ニューラルネットワークと統計学ー脳に学ぶ新しい技術ー」の2テーマで開かれ，共に多くの参加者を集めました．学会の会員はもとより，非会員の参加も多く，学会行事としてこれから定着していくものと思われます．

また，甘利俊一先生によるニューラルネットワークのセミナーには，地元千葉テレビが取材に訪れ，夜9時30分からのローカルニュースでセミナーの様子が放映されたことを付け加えておきます．

2.3　研究発表会

９つの特別セッション（うち一つは統計学会と合同），招待講演および一般講演セッションを加え，全部で21セッションが企画され，総計117題の研究発表が行なわれました．座長の巧みなリードによりディスカッションも多くみられ，研究者同士の活発な議論が展開されました．

行動計量学という学問の応用分野の広さを反映して，議論された問題は多岐に渡っていましたが，今回は特に，方法論よりも応用研究の多さが目につきました．種々の実際問題への計量的アプローチという本学会の設立目的にかなったものといえるでしょう．

2.4　一般公開シンポジウム

日本統計学会との同時開催を記念し，両学会主催の一般公開シンポジウムが，科学研究費の補助を受けて，大会2日目（9月8日）の午後，幕張メッセ国際会議室で開催されました．

シンポジウムでは，まず日本行動計量学会の柳井晴夫理事長の司会により，日本統計学会会長竹内啓，日本行動計量学会初代理事長林知己夫の両氏による基調講演が行なわれました．

引き続き，日本統計学会の美添泰人理事長の司会によるパネルディスカッションが行なわれなした．テーマは「21世紀の社会と人間ー科学的手法による予測はどこまで可能かー」で，パネラーは基調講演の2人に加え，前人口問題研究所所長河野稠果，京都大学経済研究所所長佐和隆光，放送教育開発センター所長坂元昂，国立大阪病院名誉院長古川俊之の6名でした．それぞれが一家言も二家言も持つ論客が揃い，適度に収束と発散を繰り返す興味深い議論が展開されました．

2.5　日本行動計量学会総会

日本行動計量学会総会は大会2日目の昼に行なわれました．

開催校の御領謙千葉大学文学部長および学会の柳井晴夫理事長の挨拶の後，岡山大学の垂水共之会員を議長に選出し，例年通りの議事が進行しました．

1995年度事業報告として柳井晴夫理事長から概略説明があった後，編集委員会（池田央委員長，岡太彬訓和文誌編集委員長，繁桝算男欧文誌編集長），運営委員会（田栗正章委員長）からの報告がありました．さらに，決算報告（村上征勝事務局担当理事）および会計監査報告があり，質疑応答の後承認されました．

次に，1996年度の事業計画の説明が柳井理事長からあり，同予算案が事務局の村上

理事より提示されました．これらも総会参加者の皆さんにより承認されました．

恒例の学会賞の表彰に移り，本年度，功績賞は「該当者なし」でしたが，優秀賞が岸野洋久，前川眞一の両氏に贈られることが報告され，授賞理由の紹介の後，柳井理事長より二人の受賞者に賞状と副賞が手渡されました．

続いて，次期大会が東北大学のお世話により仙台の戦災復興会館で開催されることがアナウンスされ，開催校東北大学の木谷会員よりの挨拶がありました．

最後に，今大会の開催校である千葉大学の宮埜寿夫大会実行委員長からの挨拶があり，1時間あまりで総会は閉会しました．

2.6　懇親会

本年度の懇親会は，日本行動計量学会と日本統計学会の合同で大会2日目の9月8日夕刻，幕張プリンスホテルのレストランを会場に開かれました．

丸山工作千葉大学学長の非常に示唆に富んだ挨拶の後，多くの参加者を得て和やかな懇親風景が繰り広げられました．また，今回の同時開催という大変な運営の任に当たられた千葉大の田栗正章，宮埜寿夫の両氏を始めとする千葉大学の皆さんに改めて感謝の意が表されました．

3．学会賞の授与

日本行動計量学会大会2日目の総会において，恒例の学会賞授与が行なわれました．今年度の受賞者は以下のとおりです．

功績賞：該当者なし

優秀賞：岸野洋久(東京大学教養学部)

前川眞一(大学入試センター)

お二人の受賞者には柳井理事長より賞状と副賞が手渡されました．

飽戸弘学会賞選考委員長による受賞者の紹介と選考理由，ならびにお二人の受賞者の声をお届けします．

3.1　学会賞受賞者のプロフィールおよび授賞理由

学会賞選考委員長　　飽戸　弘

岸野洋久氏は，統計数理研究所，東京大学海洋研究所，東京大学教養学部において，広く人間社会における統計学の応用研究を中心に活躍されてきました．

統計数理研究所時代に国際捕鯨委員会科学小委員会での共同研究に関して数々の論文を発表され，この共同研究をきっかけに水産資源研究者との交流を深められました．そして，栽培漁業と市場調査やサンプリング，標識調査と生存率推定等に関する多くの論文を発表しております．

東大海洋研究所では資源管理を漁家経営と漁村社会の大きな枠組みで捉える必要から漁家調査を実施されました．東大教養学部に移って以後も地域調査を毎年実施し，コミュニティの分析を行なわれております．

また分子系統学と統計モデルに関しても意欲的に研究を進め17編の論文を国際的な学会誌に発表しております．さらにまた社会・経済の統計分析に関しても数多くの著作を発表し，これまでの公刊論文数は50編を数え，さらに6冊の著書を出されています．このうち，最近の5年間に発表した論文は英文15編，和文15編の30編にのぼり，著書も，4冊出版しております．

岸野氏の業績は，いずれも行動計量に関する明確な理念のものに，妥当性ある結果を導く理論を構築しようとしたもので，さまざまな分野で注目すべき成果を挙げており，理論と応用を一体としたこれらの研究は，内外で高く評価されています．

以上の理由により，学会賞選考委員会は，行動計量学会優秀賞に十分値するものとして，評価いたしました．

前川眞一氏は，東京大学文学部心理学科大学院博士課程在学中にアメリカアイオワ大学大学院測定・統計学科に入学し，テスト理論の世界的権威メルビン・ノビック教授のもとで心理測定を学び，ベイジアン因子分析で博士の学位を昭和60年に取得しました．

昭和60年6月から1年間アイオワ大学で客員講師を勤めた後，昭和61年9月に文部省大学入試センター助教授として着任しました．その後，現在にいたるまで，大学入試センターにおいて最新のテスト理論を駆使しながら，科目間等化，得点調整，入れ替わり率の推定，などセンター試験に関連した理論的，実証的課題に幅広く取り組んでこられました．

前川氏のこれまでの研究業績は，テスト理論（これは古典的テスト理論と項目反応理論を含む現代テスト理論），因子分析，共分散構造分析といった潜在変数を含む多変量解析の理論，および多次元尺度法，PARAFAC などの3相データの解析に関連したもので，主にこれらの分析方法における未知母数の推定法とその計算アルゴリズムに重点がおかれています．

それらの研究成果は国際的な雑誌に論文として発表され，さらに，その成果の一部は因子分析（朝倉書店），項目反応理論（東大出版会）といった著書（共著）にも解説されています．

ここで，特に強調しておきたい点は，前川氏は Behaviormetrika に5編の論文を掲載していますが，このうち4編は1994年以降に掲載されたものです．

前川眞一氏は日本行動計量学会には創立後2-3年経た昭和51年から加入されていて，平成6年度からBehaviormetrika 編集委員として学会活動を支えておられます．

優秀賞受賞を契機にさらに前川眞一氏が今後ますます活躍されることを願い，選考の理由とします．

3.2　優秀賞を受賞して

岸野洋久

過分な賞をいただき，心から感謝致します．と同時に，いままで何もなし得ていないと深く反省しています．

統計学を志した頃，実際の現象に接する中で，対象分野の専門知識を活かした解析手法を開発していきたいと願いました．こうしたことから，研究は共同研究が主体となりますが，その過程で共同研究者の方々から数多くのことを学んで来ました．これらの方々に心からお礼を申し上げたいと思います．

年を重ねるにつれ，統計学から現象を見るという立場から現実に浸って統計学が生きる道を探るという姿勢へと，揺れに揺れながら，次第次第に自分自身の重心が移ってきたような気がします．これからも学会のみなさまに陰に陽に教えを乞いながら，試行錯誤の研究を進めて行きたいと思います．どうぞよろしくお願い致します．

3.3　優秀賞を受賞して

前川眞一

このたび日本行動計量学会の優秀賞を受賞できましたことを嬉しく思っています．

私の専門は計量心理学，いわゆる psychometrics という分野です．世の中に「何とか」metrics という名前の学問領域はいくつかありますが，それぞれ，「何とか」の部分を計量的に研究するための方法を開発する学問分野であると思います．

したがって，計量心理学とは，心理学の研究のために役立つような計量的方法を開発する学問領域ということになりまが，歴史的には，心理量と物理量の関係を見るいわゆる心理学的測定法（官能検査等の心理尺度構成を含む）と，知能テストや学力テスト等のテストの作成および分析を行うテスト理論のふたつ分野の分野が統合して出来たものであります．

いずれにしても，この分野で主に用いられる方法は，人間（被験者）の反応として得られたデータを何らかの統計学的モデルを用いて分析するという形をとるもので，統計学とは密接に関連した分野となっております．

世界的に見ても，学問的には決して派手な分野ではありませんが，広い意味での人間の行動の基礎を学ぶためには必要不可欠な学問領域であり，今後ともこの分野で優秀な研究者が輩出することを望みながら，受賞の言葉に代えさせていただきます．

4．第25回日本行動計量学会大会

1997年度の日本行動計量学会第25回大会は，東北大学の担当により，以下の要領で開催の予定です．

日時：平成9年9月5日（金）～7日（日）

場所：戦災復興記念館（JR仙台駅よりタクシーで5分，徒歩20分程度）

大会実行委員長：
　海野道郎（東北大学文学部）
同　副委員長：
　関田康慶（東北大学医学部）
　原　純輔（東北大学文学部）
同　事務局長：
　木谷　忍（東北大学農学部）

特別セッション，チュートリアルセミナーなどを含め大会についての情報は順次会報にてお知らせします．

5．小グループ研究会募集

日本行動計量学会では，研究活動の活性化をはかるため，毎年数件の小グループ研究会に対して資金的援助を行っています．大変遅くなりご迷惑をおかけしましたが，平成8年度の小グループ研究会の募集を下記の要領で行います．

昨年度からの継続，本年度からの新規，どちらでも結構です．奮ってご応募下さい．なお審査結果は，11月上旬にお知らせする予定です．

提出書類：研究会名，代表者名，参加予定人数，簡単な内容（50～100字程度），活動予定等を記載したもの［既定の様式はありませんが，A4版用紙を使用して下さい］．

応募期限：平成8年10月31日（木）必着

郵送先：〒263 千葉市稲毛区弥生町1-33
千葉大学理学部
日本行動計量学会運営委員会委員長
田栗 正章

お問い合わせは，田栗(Tel.043-290-2725)までお願いします．

6．Q＆A欄の新設

広報担当理事　　岩崎　学

高性能のパソコン，ワークステーションの普及と統計解析ソフトウェアの充実により，多変量解析を始めとする多くの統計的データ解析の手法が身近なものとなってきました．しかし，だからといって現象の分析が容易になったかというと，必ずしもそうでないという声を耳にします（かえって分析が画一化し下手になったという声も聞こえてきます）．

統計的データ解析の理論と応用を健全に発展させるためには，木下 (1992, 1996) の主張にありますように，統計的方法論の「メーカー」と「ユーザー」の間での対話がもっとなされなければならないと思われます．行動計量学会はこのような対話のためにこそ存在意義があるともいえましょう．

そこで，会報では，会員の皆様から「こんなことで困っている」，「どうすればい

いのでしょう」といった質問，疑問をお送りいただき，それらに対し，しかるべき人がお答えするという「Q＆A」欄を設けることにしました．木下 (1992) では主に「ユーザー」からのQが示されていますが，逆に「メーカー」からのQも歓迎します．

以下では，「Q＆A」のサンプルを示します（Aの方は必ずしもお手本という訳ではありませんが）．

Qをお持ちの方は気軽にお送り下さい（必ずしも全てのご質問にお答えできるとは限りませんが）．送り先は広報担当の岩崎です（連絡先は会報末に記載）．

引用文献

木下冨雄 (1992) 多変量解析ni'対するユーザーのニーズ．行動計量学，19-1，40-48.

木下冨雄 (1996) 学会活性化に向けての提言．日本行動計量学会会報，No. 69，2-3.

Q１：抽出すべき主成分の数の決定のしかたが分からない．

A（成蹊大・工　岩崎　学）：

主成分数の決定法には，(1) 寄与率が一定数以上の主成分まで，(2) 累積寄与率が一定数以上の主成分まで，(3) 相続く固有値の差（あるいは比）が一定以上となる手前まで，といくつかの基準がありますが，主成分分析は探索的な手法として用いられることも考慮しますと，「解釈可能性」が重要な意味をもつと思います．

その意味では抽出すべき主成分数は少ないほうが望ましく，グラフ化の可能性も考慮して，私はいつも2ないし3までの主成分を見るようにしています．もちろんその時の累積寄与率は考慮する必要があって，累積寄与率があまり小さい場合（例えば50%以下）には，主成分の解釈にあたって断定的な結論は避けるべきでしょう．

Q２：数量法では，カテゴリーに順序があるとき，計算結果の尺度値が逆転することがある．これは不合理なので対策をたてて欲しい．

A（成蹊大・工　岩崎　学）：

カテゴリーに順序があっても，「反応」に順序があるとは限りません．むしろ，順序が再現されないほうが「非線形」の関係を示唆していて興味があるかもしれません．サンプル数が少ない場合には偶然的な要素で逆転が起こることはあるでしょうが，それは止むを得ないでしょう．

順序制約を入れて尺度値を求めるという手法ももちろんありますが，私自身は，その種の手法の探索的な解析の段階ではあまり賛成ではありません．

Q３：薬剤開発の毒性試験において，3用量以上を設定した実験では多重比較法の適用は駄目で2群間の検定をすべきだという話を聞きましたが本当ですか．

A（成蹊大・工　岩崎　学）：

毒性試験では，存在する毒性を見逃す，いわゆる第２種の過誤の確率を少なくする（換言すれば，検出力を高める）必要があります．

いわゆる「多重比較法」にも多くの種類があって，ある種の多重比較法は，データ数が少ない場合いくら毒性が強くても統計的な有意性が出ないことが知られています．そのような手法をまるで考えもなしに機械的に使っていては重大な問題を起こしかねません．「多重比較がいけない」と言われたのは多分そのような多重比較法を選択してしまったためではないかと思われます．多重比較法が必ずしも悪いとはいえません．

「これならよい」という決定版はありませんが，手法の特長をよくわきまえて（これがなかなか難しいのですが）適切に手法の選択をしなくてはなりません．

7．理事会報告

7.1　平成8年度第1回理事会議事録（抜粋）

・日　時：平成8年5月13日（月）
午後6時～8時

・場　所：大学入試センター

・出席者：池田，岩崎，岩坪，江川，岡太，繁桝，高木，馬場，村上（隆），村上（征），柳井，宮埜，吉野．

1．第24回大会について

・チュートリアル，特別セッション，及び統計学会との共通テーマ，公開シンポジウムについて報告があった．

・宮埜大会実行委員会委員長より準備状況について報告があった．

・統計学会と共同の公開シンポジウムへの科研費が採択されたとの報告があった．

2．各種委員会報告

・池田編集委員長，岡太和文誌編集長より，編集委員会の討議内容（同一年度内発刊の論文誌は通しページをつける），及び22巻2号の予定，23巻1号の計画及び論文審査状況について報告があった．

・繁桝欧文誌編集委員長よりVol. 23, No. 2の審査状況，及びVol. 24, No. 1の Special Issue のテーマについて話題が出た．

・岡太運営委員会委員より行動計量学会講習会について報告があった．

・岩崎会報担当理事より次号会報についての報告があった．次号会報は10月発行予定．なお，会報に会員からの各種データ解析法の利用をめぐるさまざまな問題点についての相談事項等の欄をもうけてはどうかとの意見が出され，岩崎理事の方で検討することとなった．

3．その他

・名誉会員の推薦について岩坪理事に検討を依頼した．

・統計関連学会の懇談会での検討事項（共通名簿，共通の事務局の設置，インターネットでの共通の Homepage 等）について報告があった．

・馬場理事から国際分類学会実行委員会を代表して，学会が盛況のうちに終了したことに関し，お礼があった．

7.2　平成8年度第2回理事会議事録（抜粋）

・日　時：平成8年7月15日（月）
午後6時～8時

・場　所：大学入試センター

・出席者：池田，岩崎，岩坪，江川，岡太，久保，繁桝，杉山，高木，肥田野，村上（隆），村上（征），柳井，宮埜，吉野．

1．平成7年度決算案および平成8年度予算案

事務局より説明があり，質疑応答の後了承された．

2．第24回大会について

開催校より第24回大会の開催に関し，準備状況，申し込み件数の報告があり，また総会次第も了承された．

3．第25回大会について

第25回大会について，担当理事より準備状況の報告があった．

4．学会賞について

学会賞選考委員会の開催日程日についての報告があった．

5．各種委員会報告

・岡太和文誌編集委員長から，22巻2号を発刊したことおよび23巻1号，2号の発行予定について報告があった．また，今年から論文のページ数のふり方を変えることが報告された．

・繁桝欧文誌編集委員長から，Vol. 23, No. 2 および Vol. 24, No. 1 (Special Issue) の

準備状況が報告された．
・田栗運営委員長より，活動状況，小グループ研究会の募集についての報告があった．
・岩坪名誉会員検討委員長より，今回は名誉会員の推薦をしないことなどの報告があった．
・岩崎広報担当理事より，次号会報は10月1日発行予定であることが報告された．

6．その他
・学術会議の藤井会員より，「インターネットによる統計に関するニュースなどの速報への協力のお願い」について検討した結果，協力することとなった．なお，インターネット上で公開する内容については今後検討することとした．当面は岩崎広報担当理事が実務を担当することになった．
・会員の異動状況について，事務局より報告があった．
・応用統計学会第18回シンポジウムに協賛することとなった．
・Library of Japanese Science & Technology へ欧文誌・和文誌を寄贈することとした．

8．学術会議報告

日本学術会議会員（第4部）藤井光昭

1．第4部夏季部会

1996年7月2日（火）～3日（水）に岐阜県の東濃研究学園都市で開催され，多くの議題が審議されたが，ここでは統計学に関連したものを中心に報告する．

○　研究連絡委員会の見直しについて

研究連絡委員会の数が多いこと（特に第4部）と，新しい研究連絡委員会の設置に対して柔軟に対応出来るようにということで，第1常置委員会から検討用資料が提出された．これによると「統計学」については，数学研究連絡委員会のもとでの統計学専門委員会とされている．これは不都合と考え，早速独立した研究連絡委員会にしてほしい旨修正要望書を出した．第4部関係ではこの案に対して，基本的な考え方からして不満が多く，かなりの意見がだされると思われる．

○　国立計算機科学高等研究所の設立について

情報学研究連絡委員会を中心に構想が検討され，第4部会でも今回を含めて数回検討した．他の機関の協力等の可能性もあり，何らかの形で実現性もあり，第4部会では更に進めることとした．

○「資料の紙質の劣化についての要望（案）」，「著作物再版制度の在廃問題について（要望）（案）」，「パラダイムの転換を中心とする学術の動向について」の検討等．

2．統計学研究連絡委員会

第16期第7回会合を1996年7月22日（月）に開催した．

○　統計関連学会の懇談会で検討をすすめている共同事業としての，インターネットによるニュースの速報，共通名簿，事務局の共同運営の可能性等，について報告があった．

○　統計学の研究教育体制の整備

大学における各分野での統計の教育とその体制についていくつかの案をもとに検討した．各分野が統計の授業に何を期待しているかの調査の必要性や統計数値の意味を教育することの必要性等の意見が出された．

次に後継者養成に関して，地域ごとに単位互換制度を活用する方式等の提案をもとに検討した．また統計手法を用いる各分野の研究者等へのコンサルテーション組織の確立の必要性の意見等が出された．

9．学会カレンダー

9.1　日本計算機統計学会第10回シンポジウム

日　時：1996年11月28日（木）～29日（金）

場　所：札幌市教育文化会館
（札幌市中央区北1条西13丁目）

照会先：〒060札幌市北区北13条西8丁目
北海道大学工学部情報解析学分野
第10回日本計算機統計学会シンポジウム事務局
TEL：011-706-6804, 6856
FAX：011-706-7840
e-mail：mizuta@huie.hokudai.ac.jp
URL：http://www.jscs.or.jp/sympo96.html

9.2　応用統計学会第18回シンポジウム

テーマ：応用統計学における多重推論

日　時：1996年11月30日（土），12月1日（日）

場　所：北海道大学学術交流会館
（札幌市北区北8条西5丁目）

特別講演：

○岩崎　学（成蹊大学）ランダム化検定とその周辺ーモンテカルロ法によるP-値の調整ー

○椿　広計（慶応義塾大学）・西尾　敦（明治学院大学）モデル選択における多重性の問題

○広津千尋（東京大学）変化点モデルとその応用

○三輪哲久（農業環境技術研究所）農業実験データの解析における多重比較論争

照会先：〒223 神奈川県横浜市港北区日吉3-14-1
慶応義塾大学理工学部管理工学科内
応用統計学会事務局
TEL/FAX：045-562-4442

10．会員による著訳書

日本行動計量学会編集「行動計量学シリーズ」（朝倉書店）　完結！

1．行動計量学序説　林知己夫 著 3,296円

2．数量化のグラフィックスー態度の多変量解析ー　穐山貞登 著 3,296円

3．健康の計量学　山本俊一 著 2,678円

4．医療と社会の計量学　山岡・小林 共著 3,090円

5．リーダーシップの行動計量学ー「働く日本人」の変貌ー　三隅二不二編著 2,678円

6．真贋の科学ー計量文献学入門ー　村上征勝 著 2,884円

7．現代テスト理論　池田 央著 3,708円

8．多変量データ解析法ー理論と応用ー　柳井晴夫 著 3,399円

9．制約つき主成分分析法ー新しい多変量データ解析法ー高根芳雄 著 3,296円

10．言語の科学ー日本語の起源をたずねるー　安本美典 著 3,708円

11．意思決定の認知統計学　繁桝算男 著 3,090円

12．パターン認識ー理論と応用ー　大津・栗田・関田 共著 3,605円

13．寿命の数理　古川俊之 著 4,017円

11．統計関連学会ホームページ

日本行動計量学会を含む7つの統計関連学会が，共同でインターネットのホームページを試験的に開設しました．これは，統計数理研究所との共同研究でもあり，統計情報の公開の可能性をも探るものです．ホームページのURLは

http://sunyht2.ism.ac.jp

です．インターネットアクセスが可能な方は是非ご覧になってください．

本ホームページの運用は，今のところ次のルールに基づいています．

(1) ホームページ運用にかかる費用は，統計数理研究所との共同研究費によって賄い，各学会に金銭的な負担はかけない．

(2) ホームページへの記事の投稿は学会を経由することとし，各学会で責任者を設けて掲載すべき記事を選択するものとする．記事の内容についての責任は各学会が負う．

(3) 記事の掲載区分，掲載方法および掲載期間などは各学会の代表者による話し合いによって別途定める．

日本行動計量学会の責任者は，現在のところ，広報担当理事（岩崎）が務めています．ホームページに掲載すべき記事ならびに本ホームページに対するご意見ご要望などは，広報担当理事かまたは学会事務局にお寄せください．

12. 会報担当者より

今号の会報では第24回大会（千葉大学：幕張メッセ）の記事を中心に掲載しました．年に1度の大会が無事に終わり，いろいろな意味で一息つかれている会員も多いかと思います．お世話いただいた千葉大学の関係者の皆さんに改めてお礼申し上げます．

今号から新たにＱ＆Ａコーナーを設けました．気軽に質問をお寄せください．また，それ以外の情報も，ホームページに掲載希望のものを含め，会報担当者までお送り下さい．

原稿は，郵便でもファックスでも構いませんが，e-mail でお送りいただきますと助かります．原稿の送り先は次のとおりです．

会報原稿送付先

〒180 武蔵野市吉祥寺北町 3-3-1
成蹊大学工学部経営工学科
岩崎　学
FAX : 0422-37-3871
e-mail : iwasaki@is.seikei.ac.jp

（会報作成担当：岩崎　学・前田忠彦）

入会手続き

学会では新入会員を広く募っています．詳しくは

〒113 東京都文京区本駒込 5-16-9
学会センター　C-21
(財) 日本学会事務センター内
日本行動計量学会係
TEL：03-5814-5810
FAX：03-5814-5825

までお問い合わせください．

学会誌論文投稿先

和文誌「行動計量学」

〒171 東京都豊島区西池袋 3-34-1
立教大学社会学部
岡太彬訓

欧文誌「Behaviormetrika」

〒153 東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学教養学部心理学教室
繁桝算男

統計関連学会ホームページ

http://sunyht2.ism.ac.jp

学会からの情報，論文投稿規定などが掲載されています

平成７年度会計決算報告

収入	予算	決算	増減	備考
前年度繰越金	2,650,127 円	2,650,127 円	0 円	(注1)シンポジウム参加費
学術定期刊行物補助金	880,000	880,000	0	及び論文別刷代
７年度学会費	6,000,000	4,052,950	△ 1,947,050	
８年度前受学会費	0	3,803,000	3,803,000	
学会誌売上金	350,000	456,593	106,593	
預金利子	3,000	741	△ 2,259	
雑収入	150,000	105,630 (注1)	△ 44,370	
学会賞基金からの副賞	150,000	150,000	0	
計	10,183,127 円	12,099,041 円	1,915,914 円	

支出	予算	決算	増減	備考
学会誌制作費	6,396,745 円	4,423,596 円	1,973,149 円	(注2)平成６年度未発行分
和文誌２１巻２号	794,130	794,130 (注2)	0	
〃 ２２巻１号	900,000	959,913 (注2)	△ 59,913	(注3)欧文誌編集委員会 100,000円
〃 ２２巻２号	900,000	0	900,000	和文誌編集委員会 100,000円
欧文誌 Vol. 22, No. 1	1,502,615	1,502,615 (注2)	0	運営委員会 100,000円
〃 Vol. 22, No. 2	1,150,000	1,166,938	△ 16,938	
〃 Vol. 23, No. 1	1,150,000	0	1,150,000	(注4)４グループ
シンポジウム費用	90,000	69,051	20,949	
各種委員会活動費	300,000	300,000 (注3)	0	(注5)消費税
小グループ研究会費	200,000	200,000 (注4)	0	
学会事務委託費	1,630,000	1,313,888	316,112	(注6)事務局アルバイト
管理費	140,000	110,000	30,000	
新入会員・移動処理	90,000	78,500	11,500	(注7)ポスターデザイン料等
発送手数料	1,350,000	1,087,120	262,880	
その他	50,000	38,268 (注5)	11,732	
人件費	0	10,000 (注6)	△ 10,000	
印刷費	200,000	378,502	△ 178,502	
通信費	1,000,000	1,209,687	△ 209,687	
消耗品費	5,000	4,108	892	
会合費	50,000	62,006	△ 12,006	
雑費	11,382	110,931 (注7)	△ 99,549	
学会誌保管料	150,000	222,480	△ 72,480	
予備費	0	0	0	
学会賞副賞	150,000	150,000	0	
次年度繰越金	0	3,644,792	△ 3,644,792	
計	10,183,127 円	12,099,041 円	△ 1,915,914 円	

日本行動計量学会

自　平成７年４月　１日

至　平成８年３月３１日

結果、事実のとおり

相違のないことを証します。

監事　丘本 正

監事　[illegible]

平成８年度予算

日本行動計量学会

自　平成８年４月　１日

至　平成９年３月３１日

収入	平成８年度予算	平成７年度実績	備考
前年度繰越金	3,644,792 円	2,650,127 円	
学術定期刊行物補助金	920,000	880,000	
８年度学会費	4,359,000	4,052,950	
学会誌売上金	550,000	456,593	
預金利子	800	741	
雑収入	300,000	105,630	
学会賞基金からの副賞	150,000	150,000	
計	9,924,592 円	8,296,041 円	

支出	平成８年度予算	平成７年度決算	備考
学会誌制作費	6,343,379 円	4,423,596 円	(注1)　平成７年度未発行分
和文誌２２巻２号	1,081,500 (注1)	794,130 (注2)	
〃　２３巻１号	900,000 (注1)	959,913 (注3)	(注2)　２１巻２号
〃　２３巻２号	900,000	0	
欧文誌 Vol.23, No.1	1,461,879 (注1)	1,502,615 (注4)	
〃　Vol.23, No.2	1,000,000	1,166,938 (注5)	(注4)　Vol.22 , No.1
〃　Vol.24, No.1	1,000,000	0	
シンポジウム費用	50,000	69,051	(注5)　Vol.22 , No.2
各種委員会活動費	270,000	300,000	
小グループ研究会費	200,000	200,000	
学会事務委託費	1,320.000	1,313,888	
管理費	110,000	110,000	
新入会員・移動処理	80,000	78,500	
発送手数料	1,100,000	1,087,120	
その他	30,000	38,268	
人件費	0	10,000	
印刷費	350,000	378,502	
通信費	1,100,000	1,209,687	
消耗品費	11,213	4,108	
会合費	30,000	62,006	
雑費	0	110,931	
学会誌保管料	100,000	222,480	
予備費	0	0	
学会賞副賞	150,000	150,000	
計	9,924,592 円	8,454,249 円	